

しまなみ農業だより

接木苗と 自根苗



そろそろ夏野菜を植えようとホームセンターに行きますと、ナスやトマト、スイカなどでは「**接木苗**」と書かれたものが売られています。ちよつぱり高い。高いと何か良さそうなのがして、つい買ってしまします。いっぽうで棚には袋に入った種が並んでおり、いろいろ美味しそうな新品種がたくさん並んでいます。これを播いて出来たのはもちろん「**接木苗**」ではないわけで、どちらが良いのでしょうか？

1 接木苗でない苗は「自根苗」

接木苗とはすなわち、自分（地上部…茎や葉、花・果実も）とは違う根っこ（地下部）を接いでいる、ということ、根っこは台木ともいい、地上部となる挿し穂と親和性のある台木用品種（挿し穂と同種か、親戚にあたる植物）を用いるのが普通です。種を播いて苗を育てると、まず根が出て、後に芽が出ます。茎、葉はもちろん根っこも自分自身（地上部と同じ個体）ですから、こうしたものを「**自根苗**（じこんなえ）」といいます。挿し木をすると、枝から根が発生するわけですが、穂木品種と同じ個体の根っこになるわけでは

から、これも自根苗です。

2 味が良いが連作障害を起こしやすい自根苗

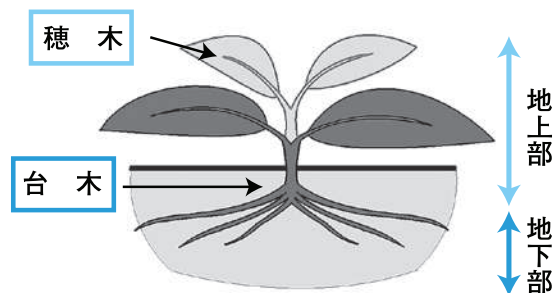
植物の葉や花、果実（地上部）は根っこ（地下部）の影響を受けます。もし、果実の味の良さで選抜された品種があったとして、その品種の力を100%発揮しようとすれば、自根苗でなければなかなか出来ません。スイカが良い例で、台木にはカボチャやユウガオを用いるのが普通ですが、自根苗で育てたスイカの果実は切ったときの切り口がしゃんとしており、肉質もとても良いものです。ところがカボチャ台のスイカは、同じ穂木品種であっても肉質にややしまりがなく、敏感な人はカボチャのにおいがする、といいます。ではなぜ味を犠牲にしているのか。スイカは毎年同じ畑で栽培していると、つる割れ病という土壌伝染性の病気が発生しやすくなり、株が枯れて栽培できなくなるため、つる割れ病に強いカボチャを台木として使うのです。ユウガオはカボチャよりもつる割れ病に弱いものの、味の良いスイカができるため、味にこだわる生産者はユウガオを台木として使う場合があります。

同じ作物を同じ畑で繰り返し栽培し続け、特定の病虫害が発生して栽培できなくなる現象を**連作障害**といい、ウリ科のスイカ、メロン、キウイやナス、トマト、ピーマンといったナス科野菜では顕著に見られ、1度栽培すると3年〜5年はその畑で栽培しない方がよいとされています。昔から**輪作**と言う考え方があり、ひとつの畑で年ごとに順に栽培する作物を替えていき、3年から5年くらいで一巡するのは、この連作障害を防止するためのものです。しかしながら、一度家庭菜園の経験がある方ならおわか

りいただけれると思うのですが、いろいろ考えて植栽計画を立て、うまくいくと、次の年にも同じところに植えたくなるものです。プロの生産者のナスやトマトなどはハウス栽培が前提で、よほどたくさんハウスの持つていない方ならともかく、限られたハウスで集約経営を行っていると、どうしても同じハウスで繰り返し栽培しなければならなくなります。土壌伝染性病害虫被害抑制のための野菜の接木苗の開発は、このような事情により発展してきました。

3 家庭菜園なら自根苗栽培も

限られた畑で行われる家庭菜園において、毎年ピーマンやナスを植えないければならないなら、少々高くても接木苗をお勧めします。土壌病虫害に少々気をつけておけば、毎年80点の収穫が保障されます。しかしながら、特徴のある在来品種や、特に味の良い新品種で、今年は特にこれにこだわってみよう、と挑戦するとき、種まきから始める自根苗栽培もなかなか面白いものです。特に栽培技術にこだわらなくても、品種特性を反映した味の良いものが採れます。もちろん、この美味を次回味わうのは5年後に予定した方が無理です。



接木苗（割り接ぎ）のイメージ
台木の双葉はやがて枯れ落ち、穂木の双葉の間から本葉が展葉、伸長する。